

神のやま

第2号



播磨国総社 一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会

伊和大明神臨時祭之画図 姫路市立城郭研究室蔵

播磨国総社・三ツ山大祭の芸能



園田学園女子大学非常勤講師

久下 隆 史

一 平成二十五年の三ツ山大祭

平成二十五年四月、二十年に一度の三ツ山大祭が行われました。いうまでもなく、この大祭では、巨大な二色山、五色山、小袖山を神門の前に設け、山上の小社には、それぞれ九所御霊の神、播磨国十六郡の明神、天神地祇が迎えられました。神門上の門上殿に遷られた射楯大神、兵主大神が播磨国のみならず、天上・地上の神々を招いて、ともに時を過ごされるのが三ツ山大祭になります。この期間は、神と神、神と人がともに芸能を楽しむ機会が設けられます。

この三ツ山大祭では、姫路城の三の丸広場で行われた行宮祭の五種の神事のほか、千人稚児行列、横綱白鵬の土俵入り、お華やお茶の献納、日本舞踊や新日本舞踊の奉納がありました。

また神事の一環として神賑わい行事も行われ、姫路市民の諸芸

能の奉納のほか、播磨の獅子舞、石見神楽や備中神楽の奉納もあり、古今の芸能に神も人もお祭りを堪能した一週間だったように思います。

こうした、諸芸能の奉納とともに今回の特色は、近隣の自治会、中学校や高等学校、兵庫県立大学と陸上自衛隊姫路駐屯地有志によって、播磨国にちなんだ造り物が奉納されたことです。近世・近代の町をあげての大掛かりな造り物とはことなり、決められたスペースの中で造り物が展示され、中には電動で動く精巧なものもありました。

このような、五種の神事や市民の諸芸能の奉納、造り物などは、奉納する人たちは異なりますが、江戸時代の三ツ山大祭の流れを引き継いでいます。

二 天保四年の三ツ山大祭

平成二十五年の三ツ山大祭では、参詣者の便宜を図るため公



播州姫路総社天保癸巳
臨時大祭礼略記
(姫路市立図書館蔵)

式ガイドブックが発売されました。これは、江戸時代も同じことで

す。天保四年（一八三三）の三ツ山大祭のガイドブックは『播州姫路惣社 天保癸巳臨時大祭礼略記』として姫路船場御堂前の灰屋輔二などで刊行されています。また、「姫路惣社臨時大祭礼絵図」も作られました。この年の大祭は、九月六日から十二日まで行われ、最後の十二日に神式がありました。臨時大祭礼というのは、現在の三ツ山大祭のことです。

大祭礼略記には、まず謡囃子の一行が書かれています。謡囃子の一行は山ごとに異なりますが、御幣、警護、鎧をつけた具足者、傘鉾と鼓・太鼓・笛・地謡などの人々、見附台とよばれ、武人や動物などの造り物を車に乗せて引き出していたようです。この年には、東の山に属す西紺屋町が豊玉姫、野里三町が山姥の造り物を出しています。

次いで渡り物がでてきます。現在の五種の神事にあたるもので、流鏑馬、競馬、神子、一つ物、弓鉾指が出ています。最後は「渡り物相すみ御能をします」とあって、各山で能が行われました。各山では、四天王、幸有、丹鶴のあとで能を演じていました。この年は東の山は、氷室、鞍馬天狗、俊成忠盛、南の山は加茂、経政、金輪、西の山は嵐山、実盛、船弁慶を演じています。能の次は、姫路藩から除地とされた寺院が各山に奉納した造花が書かれています。最後に医師や、迷子の宿、取り上げ婆の宿などが書かれており、この案内一冊で大方のことが分かるようになっていま

した。

ここに書かれているものが、参詣者の最も知りたいもので、その多くが芸能とかかわることが分かります。特に、能組は大きな太い字で書かれており、参詣者の楽しみになっていたようです。次に、こうした三ツ山大祭の芸能について詳しく見てゆくことにします。

三 渡りもの

謡囃子は承応二年（一六五三）の三ツ山大祭を描いた「伊和大明神臨時祭之画図」に登場しています。大永二年（一五二二）の大祭記には、播磨国の守護赤松政村の命で十ヶ村の氏人が行った「童謡花かざ



伊和大明神臨時祭之画図 二色山の謡囃子踊
(姫路市立城郭研究室蔵)

り」がそれにあたる可能性があります。九ヶ寺院が造花を出しているのも、江戸時代に三ツ山の花を城下の寺院が出していたことにつながります。現在は、失われてしまいました。謡囃子は室町時代の終わりごろから続く芸能になります。

この画図は、当時の姫路城主榊原忠次ただつぐが絵師に描かせたものですが、そこには祭礼当日の神社の景観、神門付近の様子が描かれ、次いで各山に属する謡囃子踊の一行が描かれています。次いで競馬、神子渡みこわた、一つ物、弓鉾指と続き、最後に流鏑馬が出てきます。画図の最後は各山で演じられる能の様子が描かれ、街路と城門付近の警護の様子で終わります。

興味深いのは、内容が江戸時代の祭礼ガイドブックと大きく異ならないことです。城主や藩士、氏子や参詣人の興味は共に、最後の日に行われる神式の渡りものや各山の能にあったことが分かります。江戸時代の人たちに人気があったのは、氏子が奉納する芸能でした。現行の三ツ山大祭では、中の日大祭で行われる神幸祭、行宮祭にあたります。神幸祭の沿道や、行宮祭の行われる三の丸広場を人が取り囲む光景は、場所は異なりますが江戸時代から現在まで続くものでした。

謡囃子というのは、各山に属し、山を警護する長刀ながなたを持つ鎧武者の一団のあと、竹杖を持つ先払いが続き、その中に山ごとに異なりますが、先に藤や菊の花をつけた大きな傘鉾が立っています。

す。傘鉾の前には、縮太鼓しめだいこを持つ太鼓持、太鼓を打つ太鼓打ち、女装をして鼓や笛を吹く者がいます。山によっては鉦を打つ者も出ています。小袖山の太鼓打ちは背中に大きな瓢箪ひょうたんを背負っています。この囃子に合せて花を手にした十人以上の女性が鮮やかな着物を着て踊っています。小袖山の踊子はシャグマを着けた男児のようです。この謡囃子踊は、山を囃す一団と思われます。室町時代の終わりから、江戸時代の始めに流行した風流踊ふうりゅうおどりを取り込んだものといえます。この謡囃子踊の一団とともに、江戸時代中頃以降に、手の込んだ人形や造花をのせた曳ひきものや、お囃子を演じる囃子台なども登場し、にぎわいを増していきました。

現在、行宮祭で行われる五種の神事は、江戸時代には謡囃子踊と同じように、総社の近くにあったお旅所へ渡ることから渡りものとよばれました。競馬、神子渡、一つ物、弓鉾指、流鏑馬は衣装と演者は異なりますが、競馬と流鏑馬以外は当時と大きな変化はありません。競馬は、江戸時代の終わりには、曲馬きょくばが加わり人気を博していたようです。この一連の芸能は、中世に京都や奈良の祭礼で見られたものが、近世初頭に市川流域の祭礼に導入され、三ツ山大祭にも取り入れられました。形が整うのは江戸時代の始めになります。

四 三ツ山での演能

渡りものがすむといよいよ、各山に設けられた能舞台で能が演じられました。残された史料から判断して、各山の能舞台は江戸時代の初めに設けられ、昭和八年の三ツ山大祭まで見られたようです。しかし、昭和八年に能が演じられたのは、この舞台ではな



伊和大明神臨時祭之画図 二色山の舞台と能
(姫路市立城郭研究室蔵)

く昭和初年に造られた常設の能舞台と考えられています。そうすれば、各山に設けられた能舞台で能が演じられた最後は大正八年(一九一九)ということになります。江戸時代には、各山共に氏子に能を指導したのは宝生流ほうしょうりゅうに属す孔雀太夫くじゃくだゆうという能

楽師でした。演能の順番は神前でくじが引かれ、その順番でまず能一番、一巡して能二番、最後に能三番が演じられました。その際、各山とも最初に四天王、幸有、丹鶴を演じました。先に紹介した、天保四年の『臨時大祭礼略記』には四天王四人、幸有二人、丹鶴二人が出ています。四天王は白い衣装に烏帽子えぼしを着け、弓矢を持って舞台の四隅に居るとあります。別の史料では四方堅しほうかためといわれていますので、舞台を警護し鎮める武人のようです。幸有は素襖すおう烏帽子を着けた二人が笹を手にして舞い、丹鶴は赤い装束を着けて鼓を首にかけて舞います。この最初の舞は、三ツ山大祭独特のもので儀式的な演目といえます。天保四年の各山の能組は、すでに紹介しています。

このほかにも、町場の屋根の上には加藤清正の寅退治のような巨大な造りものが設けられていました。この造りものは、平成二十五年の三ツ山大祭で復活されています。

本文では、江戸時代の三ツ山大祭を楽しんだ者たちの関心ごとを紹介しました。昔も今も、その関心は芸能でありました。これからも、神社と氏子の人たちはもちろん、市民の多くも参加し、神と共に人も楽しむ祭であってほしいと思います。



写真で見る
一ツ山大祭（昭和三年）



玉藻前安倍泰成館の場（宙釣狐）（新元町）



一ツ山



神崎與五郎の東下り（鍛冶町）



宇治川の先陣（米田町）



橋弁慶（福中町）



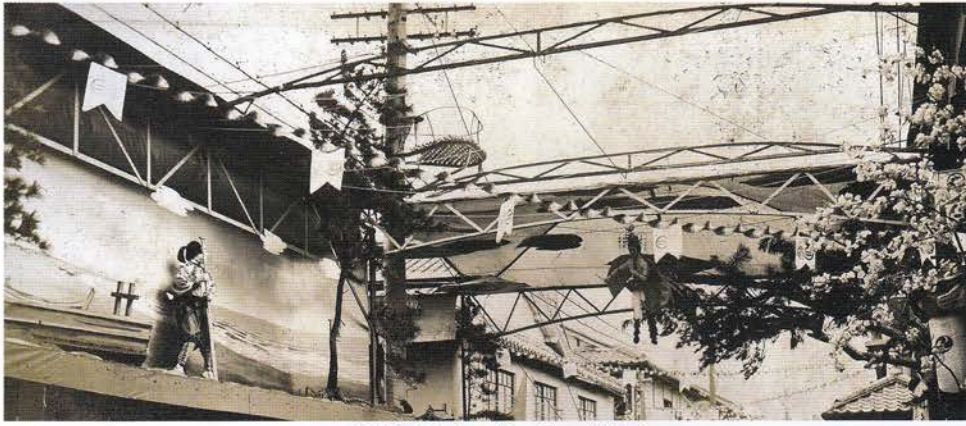
天の岩戸（野里寺町）



千本桜（西神屋町）



門上殿



三保松原羽衣の場 (中二階町)



富士の巻狩 (元塩町)



五条の橋 (東呉服町)



道成寺 (俵町)



桜井の駅 (東二階町)



川中島の合戦 (東魚町)

播磨国総社蔵
木村政勝氏
アルバム



龍虎の争 (本町)



加藤清正の虎狩 (光源寺前町)

平成二十九年 保存会活動報告

播磨国総社 一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会役員会開催

(平成二十九年七月十九日)

平成二十九年度 播磨国総社 一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会役員会を、総社会館にて開催しました。

平成二十七年秋に当保存会が発足してより三年目となる役員会となり、三十一名の役員方々の出席、二十八名の委任状をいただき、開会しました。



保存会会長田中種男より、開会に際しましてご挨拶を申し上げ、議長を田中会長に選任し、議事に入りました。

平成二十八年度事業報告に続き、同収支決算報告、平成二十九年度事業計画、同収支予算について説明し、一同異議無く承認されました。

平成二十九年 文化庁文化遺産総合活用推進事業

造り物学習会 (三ツ山を造ろう)

(平成二十九年九月三十日～十一月三十日 六日間)

平成二十九年度のメイン事業「造り物学習会」を、昨年九月から十一月の六回に亘り開催しました。

今回の造り物製作にあたり課題は、第一に三ツ山大祭の「やま」を製作する。サイズは十分の程度。第二に、固定常設式ではなく、容易に移動でき設置できるものにする。



このような容易ではない課題をクリアすべく、ものづくり作家、どうのよしのぶ先生に講師をお願いしました。

先生は前回の三ツ山大祭の際に、各団体が造る造り物の製作指導にあ



たっていたいただいたご縁もあり、今回特別にご指導いただけることになりました。

三ツ山の基本構造、三つの山のデザイン、山上殿の製作図面、製作手順、製作指導など細部に亘り先生からご指導をいただき、作製にあたりました。

製作は回を重ねて進むにつれ、だんだんと難しくなっていきました。参加者からは「これは難しい」「大変や」という声も聞かれ、悪戦苦闘しながらも熱心に取り組む姿がそこにありました。その真剣さからか「久しぶりに集中して作業した」など、清々しい爽やかな声が聞かれました。

この学習会では、六日間延べ一四七人の参加をいただき、皆様のご協力により素晴らしい「三ツ山」が完成となりました。

今後、この「三ツ山」は総社のお祭りや、商店街のイベント等で展示するなど活用させていただきます。



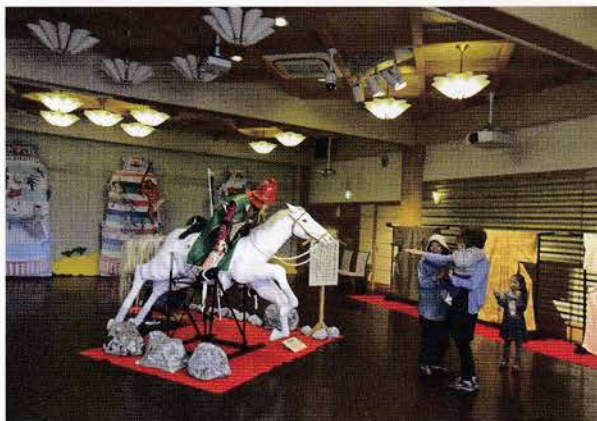
平成二十九年文化庁文化遺産総合活用推進事業 小袖の陰干し・三ツ山大祭古写真展

(平成二十九年十月二十一日)

播磨国総社長生殿にて、英文チラシや説明文も用意して「写真と映像で見る昭和二十八年三ツ山大祭」「平成二十五年三ツ山大祭造り物」及び市民から寄進され平成四十五年(二〇三三年)三ツ山大祭小袖山に使用する「小袖の展示」を行いました。

昭和二十年姫路空襲で破壊された姫路の町が復興したときの大祭の情景に御年配層は懐かしく、青少年に当時のことを語り伝える機会となりました。

当日は生憎の天候となりましたので小袖の陰干しは改めて十二月四日に総社境内で行いました。



小袖山に飾る小袖の陰干し

(平成二十九年十二月四日)

十月二十一日の降雨により延引しましたが、小袖の陰干しを師走の初旬、十二月四日に総社境内にて行いました。

播磨国総社三ツ山大祭の三基の山の内、小袖山を飾る小袖です。作業は、当保存会々員の方々約二十名の奉仕により、小袖、羽織、襦袢を分別しながら、小袖約二〇〇領の陰干しを行いました。



小袖山は山の一面に一般の方が寄進した小袖を、約八五〇領貼り付けます。寄進された小袖は次回の三ツ山大祭に使用する為、毎年陰干しを行っています。

皆様からのご寄進をお待ち申し上げます。

伊和大明神臨時祭之画図

(姫路市立城郭研究室蔵) が平成三十年四月二十日付け姫路市指定重要有形文化財に指定されました。



本画図は姫路藩主榊原忠次が神職に旧貫を訪ねて執行した承応二年(一六五三)の播磨国総社臨時大祭礼(三ツ山大祭)の記録を後世に残すため九月十日癸卯の日の祭儀を絵師に描かせたものです。同年十一月二十三日に播磨国総社に奉納された画図は残念ながら戦災で焼失しましたが、本画図は榊原家に残されたものが昭和五十二年に姫路市に譲渡されたものです。

本画図は紙本着彩で縦三一・二寸、長さ一八六・一一寸、巻頭の見返しは幅二二寸の紙本金砂子散し、伝統的な絵巻の構図や構成に通じており、現在知られる三ツ山祭礼を描いた絵画のなかで制作年の判明する最古のもので、何より本格的描写で祭礼全体を記録した唯一の貴重な作品なのです。

掲載図は姫路町から繰り出された「謡拍子踊り」が小袖山の栈敷前に到着し、猿楽(能)が始まるところです。

付録 三ツ山大祭山上殿製作キット「リアルなお社をつくってみよう」

ものづくり作家 どのよしのぶ氏作 提供

◆準備物◆

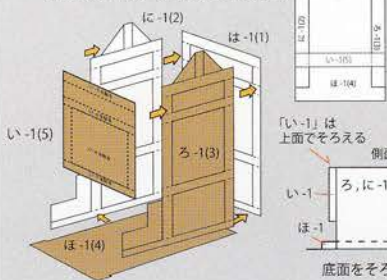
カッターナイフ、カッターマット、金属製定規、ピンセット、接着剤（木工用ボンドか瞬間接着剤）、爪楊枝

☆切り出しの注意

隅から切り出す。

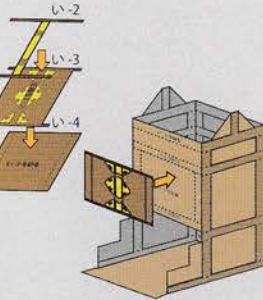
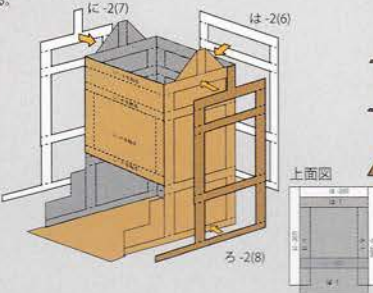
紙を回し隅から別方向へ切り出す。

「は-1」に「に-1」「ろ-1」を張り付け「ほ-1」を張り付ける。



()内の数字は張り付ける順番。貼り付ける面に気を付ける。

指定された場所に順番に張り込んでいく。



ステップ台紙「へ-1」を曲げてからへ-2、へ-3、へ-4、へ-5の順番で貼る。

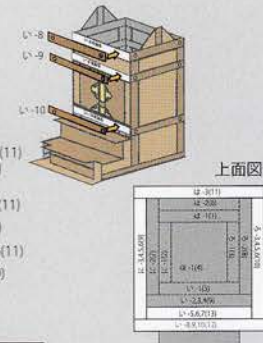
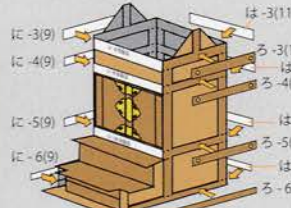
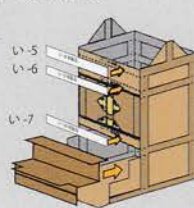
表から軽く切り込みを入れる



裏側から軽く切込みを入れる

「へ-1」を本体の内側に張り付ける。

指定された場所に順番に張り込んでいく。

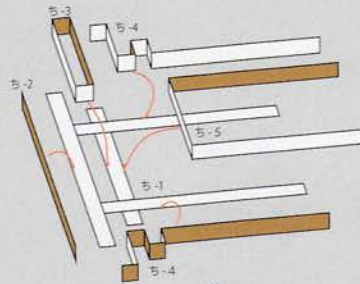
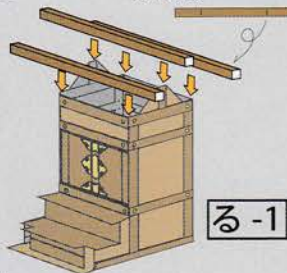


「と-1」と「と-2」を下記図のように貼り合わせる

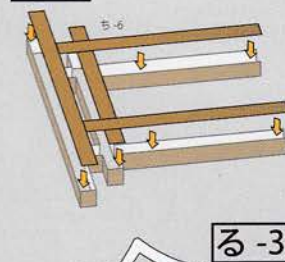


3セット作る。

「と-1」のガイドに合わせて本体に貼り付ける。

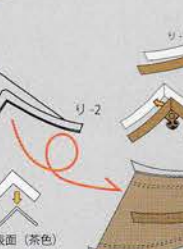
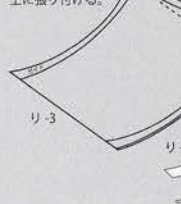


る-2



る-3

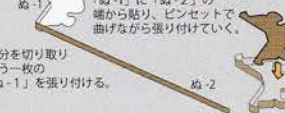
「り-1」「り-2」を「り-3」(裏面)の上に張り付ける。



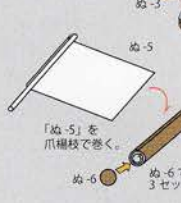
「り-4,5」の後に「り-7,8」を貼る



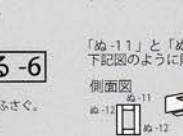
る-4



「ぬ-1,2」と同じように「ぬ-3,4」も端から貼り、ピンセットで曲げながら張り付けていく。



「ぬ-11」と「ぬ-12」を下記図のように貼り合わせる。

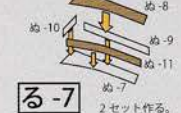


それぞれ2セット作る。

る-8



「ぬ-7」に「ぬ-9,10,11」を張り付けその上に「ぬ-8」貼る。



「ぬ-13」と「ぬ-14」を下記図のように貼り合わせる。



2セット作る。

る-9

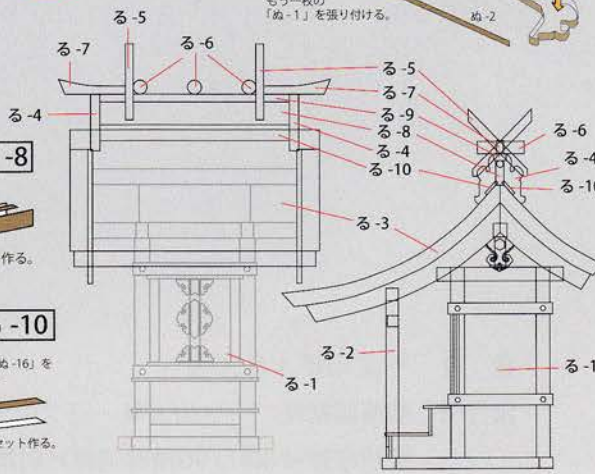


「ぬ-17」に「ぬ-16」を貼り合わせる。



2セット作る。

る-10





発行 平成30年4月30日

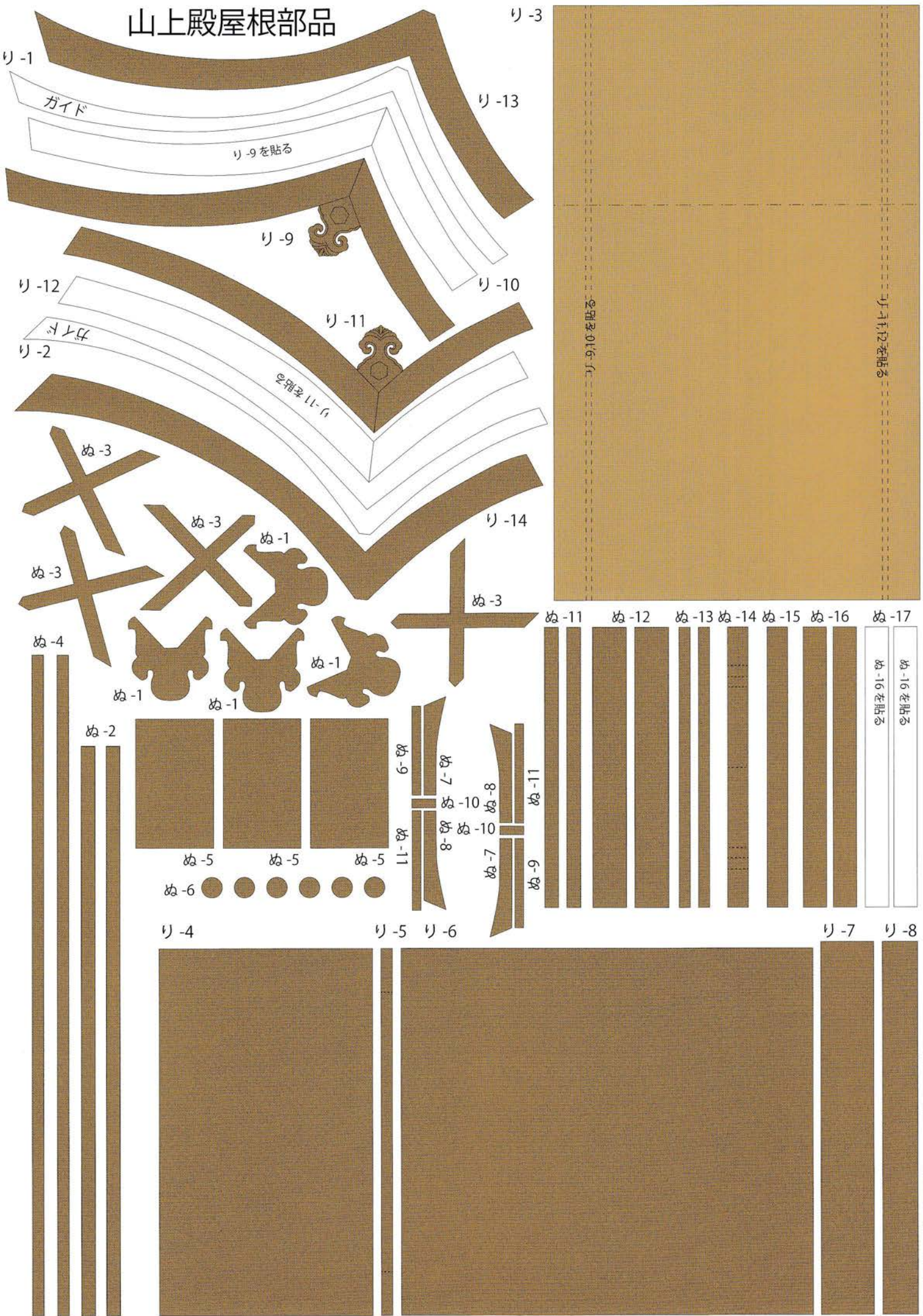
発行所 播磨国総社 一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会

姫路市総社本町190播磨国総社射楯兵主神社内

☎ 079-224-1111 fax 079-224-1114

E-mail hozonkai@sohsha.jp HP <http://sohsha.jp>

山上殿屋根部品



山上殿屋根部品

リ-3

リ-1

ガイド

リ-13

リ-9を貼る

リ-9

リ-12

リ-10

リ-11

リ-2

ガイド

リ-11を貼る

む-3

リ-14

む-3

む-1

む-3

む-3

む-4

む-1

む-1

む-1

む-2

む-5

む-5

む-5

む-6

む-9

む-7

む-10

む-10

む-8

む-7

リ-11

む-11

む-6

む-9

む-11

む-12

む-13

む-14

む-15

む-16

む-17

む-16を貼る

む-10を貼る

リ-4

リ-5

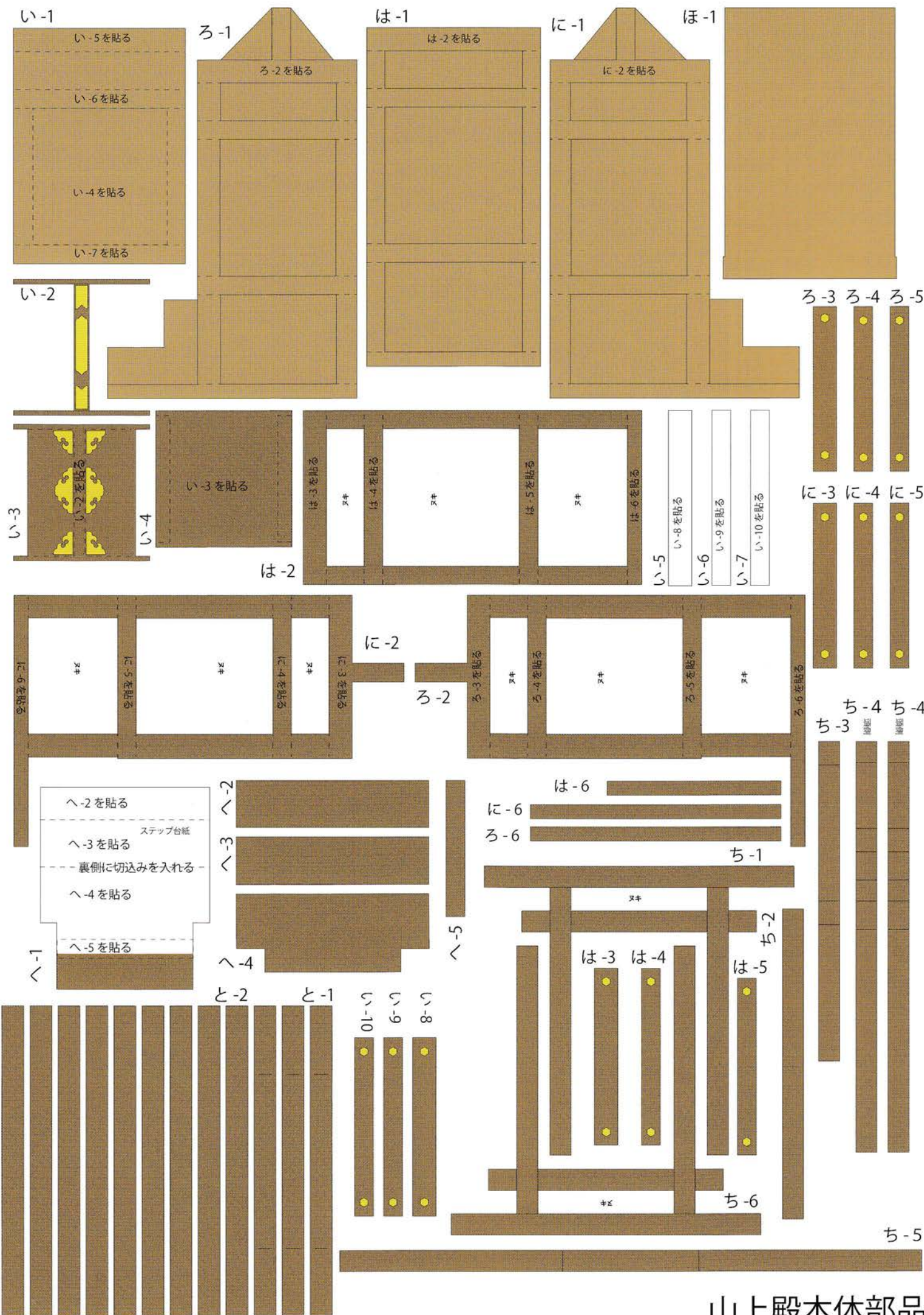
リ-6

リ-7

リ-8

リ-9,10を貼る

リ-11,12を貼る



山上殿本体部品